

修士論文概要

地域日本語教育における「教える－教えられる」関係を問い直す
－ 教室参加者の語りの分析から －

中野裕美子

第1章 本研究の目的

日本語教育の新たな枠組みである「地域日本語教育」は何を目指すか、「地域日本語教育」とはどのようなものであるかはこれまで、部分的にしか明確にされていない。先行研究では「地域日本語教育」について、現場で起こっていることをもとにいくつかのことが明らかにされ、理念や方法の提言がなされている。それらにともない、地域日本語教育現場でのコーディネータの必要性やボランティアの役割についても語られてきた。しかし明らかにされてきたことのほとんどは、地域日本語教育の対象者である日本語を母語としない住民の語りや意見が通されたものではない。

本研究ではまず先行研究を整理することから、「地域日本語教育」について議論され、構築されてきたことについて概観する。その上で現在までに構築されてきた「地域日本語教育」の理念や方法について疑問をもち、これらが表面的な部分にとどまっているという事を指摘する。さらにこれまでの研究で不足していた、日本語を母語としない住民の語りから、地域社会の中で、「ことばを獲得する」ことや「日本語を学習する」ことの意味について考察を深める。これらを通して、日本語を母語としない住民の語りから「地域日本語教育」を問い直すことを本研究の目的とする。

第2章 先行研究

本章では、地域日本語教育の成り立ちから課題とされる、地域日本語教育の現場での住民同士の関係性の構築に関すること、地域日本語教育の内容や方法について概観する。また地域日本語教育の理念として掲げられる「多文化共生」について、そのことばがもつ意味や国の動向とともに整理する。

日本語教育の専門的な機関で展開されてきた「学校型」日本語教育が地域日本語教育の現場に持ち込まれることには問題があると指摘され（田中 1996、森本 2001、尾崎 2004 他）、その理由として、日本語を「教える－教えられる」という活動のスタイルが「先生－生徒」という権力関係を生むとされてきた。先行研究ではこのような母語話者と非母語話者の非対称な関係性の指摘をもとに、住民同士の「対等」で「相互」的な関係性を構築するための方法論が追い求められてきた。しかし OHRI (2005) がいうように、母語話者住民と非母語話者住民の非対称な関係性は活動の内容や方法のみでつくられるものではない。だからこそ、地域日本語教育現場での学習内容や教室活動の進め方は、理論的に規定されるのではなく、各地域日本語教育現場のボランティアと日本語を学習する主体が相互の

コミュニケーションを通して決定していくものであると考える。

田中（1996）、森本（2001）、尾崎（2004）などの指摘をもとに、地域日本語教育の現場における住民同士の「対等」な関係性を構築する新たな方法として「自己表現型」（米勢 2002）の日本語教室活動や「共生言語としての日本語」教育（岡崎 2007 他）の理念に基づく教室活動設計が行われてきた。このような地域日本語教育の理念に基づく方法論を整理することから、地域日本語教育の具体的な現場に落とすときの問題点や課題点について述べる。最後に地域日本語教育の理念として掲げられるようになった「多文化共生」が使われる文脈と「多文化共生」に関しての国の動向を整理することから、このことばが使われる背景について考察し、地域社会で「多文化共生」が実現されるための新たな意識や考え方について提案する。

第3章 調査の概要

はじめに日本語を母語としない住民の語りを聞く意義を2点述べる。

まず1点目は、地域日本語教育研究の中に、日本語を母語としない住民の語りや立場を直接反映させることである。次に2点目として、日本語を母語としない地域住民が地域日本語教室や日常生活の中で経験し、考え、感じていることを日本語で語ることそれ自体である。日本語を母語としない住民が日本語で語ることは、語り手のこれまでの生活の連続の中で獲得された固有のことばによって、個々の生成と変化のプロセスを表象することである。したがってこのような語りを地域日本語教育の研究に反映させることの意義は大きい。またこのような語りの中から、地域で生活する住民がどのように日本語と対峙し、どのような経験をしてきたのかを知ることで、地域日本語教育の現場での日本語支援のあり方を考え直すことができる。

本調査は1か所以上の地域日本語教室に参加する地域住民のラリータさん、春さん、ジニさん、菓子さんへのインタビュー調査である。インタビュー調査は各インタビューーに合計2回行った。1回目のインタビュー時期は2008年3月18日から2008年4月30日までの期間に、各インタビューーの生活と日本語、地域日本語教室での経験についていくつかの項目を立てた半構造化インタビューを各1回、平均約2時間程度行った。2回目のインタビュー時期は2008年10月30日から2008年11月18日の期間で、1回目のインタビューデータを文字化したものをもとに、内容が不明確な部分や各インタビューーの伝えなかった内容に対しての筆者の解釈が正しいかどうかを確認するフォローアップインタ

ビューである。2 回目のインタビューでは、各インタビューイの固有名詞について話し合い、本論文に登場する地域住民として仮名をつけてもらう、または実名を出す許可をいただいた。

インタビュー調査に至るプロセスとして、東京都 A 区が主催する地域日本語教室に約 4 ヶ月間、毎週 1 回の見学参加をした。この教室は「生活に必要な日本語」を主な学習内容とし、週に 2 回（月曜日と木曜日）、各 2 時間の日本語学習活動が行われていた。教室で行われる日本語学習活動に毎週参加することで、ラリータさん、春さん、ジニさん、菓子さんとの信頼関係が構築され、インタビュー協力の許可を得た。

インタビューの分析方法は、「語られた真実」に関心をもち、どのようにそれらの経験が構成され、意味づけられているかを中心とする（やまだ 2007）ライフストーリー研究の手法を用いた。分析の観点は以下のとおりである。

- ・「生活の中での日本語ニーズ」が地域日本語教室への参加動機や日本語学習動機へとどのようにつながっているか
- ・地域日本語教室において「学習者」である日本語を母語しない住民と「先生」であるボランティアをする住民の相互のコミュニケーションが成り立っているかどうか
- ・「学習者」である日本語を母語としない住民は地域日本語教室で「ボランティア活動」をする住民の多様性をどのように見ているか

このような観点をもとに 4 章では、インタビューイから得られた語りを抽出する。

第 4 章 日本語を母語としない住民の語り

ここでは各インタビューイの語りから、筆者が分析し解釈を加えたものを分析の観点にそって描く。4-1 では、インタビューイのそれぞれの語りに現れた経験に基づく日本語のニーズと地域日本語教室への参加動機や日本語学習動機の間について分析、解釈をする。ここでは、ラリータさん、春さん、ジニさん、菓子さんの語りの中に、それぞれの生活の中でのあらゆる経験と、その経験を通して立ち現われる日本語のニーズを明らかにする。ラリータさんは、子どもの幼稚園のお母さんたちとのコミュニケーションの中で、地域日本語教室で覚えたひとつひとつのことばが生かされる。春さんは、自分の考えていることや気持ちを表現したいから、それが達成されるようなことばの形を地域日本語教室で教えてほしいという。これは春さんが生活の中で出会う人とコミュニケーションをする時に、心を通じ合わせるための一部分になるのである。ジニさんは、ママ仲間ともっと話

ができるように、もっと分かり合えるように、地域日本語教室で学習する。教室で話をすることや文法の学習をすることが、ママたちとの次のコミュニケーションにつながり、子どもが学校からもらってくる丁寧な文章のお手紙を読む力にもなる。最後に菓子さんは、自ら積極的に近所の人などとコミュニケーションをする中で、より豊かな関係性を築いていくために、どうやって使うかわからない文法を学習し身につけることや、新しいことばや漢字を獲得する必要性があるという。そして地域日本語教室で学ぶコミュニケーションの核となるあらゆる日本語の文法や語彙を日常生活の中で使っていくことで、日本語がより自分の固有のことばとなっていくということがわかった。

4-2 では、地域日本語教室における「先生」と「学習者」の関係性を、「相互のコミュニケーションが成り立っている」か否かという観点から分析する。

菓子さんの語りには、「クラスの時間だけで友達にならなかった」、そして「本当の心から教えない」のようなボランティアの在り方が現れる。このようなことは菓子さんの日本語学習への動機を減少させ、そこでの日本語の学習内容を自分のものにできない要因となっていることが解釈できる。またラリータさんは、地域の日本語教室では「先生」に「いろいろ聞くことができる、話すことができる、勉強もあるけれど、勉強だけではない」ということを語り、教室での「先生」であるボランティアとの関係性は「家族みたいで友達みたい」であるという。このような関係性がラリータさんの日本語教室の参加継続につながるということが語り全体から解釈できる。そして、春さんの語りでは、地域日本語教室のボランティアの先生たちが日本語を「教える」ために努力をしていることが伝わるからこそ、春さんの日本語学習が促進され、その結果日本語が上手になったということが意味づけられている。これらの語りに見られるように、地域日本語教室での「先生」と「学習者」という役割関係が即権力関係を生み出すものとはならないことや、日本語を「教える-教えられる」という活動自体に問題があるのではないということがわかる。

4-3 では、地域日本語教室における日本語学習場面での「学習者」である、地域の住民がボランティア活動をする住民の多様性をどのように実感し理解しているかということ語りから描く。ラリータさんの語りから、「学習者」という立場から地域日本語教室にいるさまざまな「ボランティア」を多面的に見て、その人それぞれの良さを認め、受け入れているという姿が浮かび上がった。また菓子さんの語りには、さまざまな活動動機や活動目的をもつボランティアの多様性を実感を通して理解しようとする姿が現れている。しかし、あらゆるボランティアに出会ってきた菓子さんは、ボランティアをする目的や動機がそれ

それぞれの日本語学習支援活動に反映されるということも語った。またそれらは主に「学習者」である日本語を母語としない住民とどのように関わり、関係性を築こうとするかということに見られるということが、菓子さんの語り全体を通して解釈できる。

ラリータさんや菓子さんは地域日本語教室で「学習者」という立場から、ボランティアの多様性を客観的に見て、積極的にその多様性を受け止めようとしている。このような事実から、地域日本語教育の現場における「多文化」とは何なのか、「多文化共生」とはどのような実践を示すかということについて考える。

第5章 日本語を母語としない住民の語りからの考察

本章では、4章に見た日本語を母語としない住民の語りから、日本語を母語としない住民が地域日本語教室で、具体的にどのような日本語学習活動を求め、必要としているのかを考察する。

5-1では、各インタビューの語りから、日本語を母語としない住民がそれぞれの生活の中でのコミュニケーションをより豊かにするため、生活行動の幅を広げるためには、いわゆる文法や文型、漢字や語彙のような「日本語」が必要であるということを述べる。そして地域日本語教室に参加し、ボランティアである地域の住民から日本語を「教え」られたり、「提示」されることで、新しい語彙や文法や漢字を知り、理解することを含める地域日本語教室での活動は、それぞれの生活とつながりをもっているということを考察する。

5-2では、地域日本語教室における「先生」と「学習者」という関係性は、ボランティア活動をする住民が「先生」として、日本語を教えたり、提示することそれ自体に問題があるのではなく、どのような意識や気持ちをもって「教える」「先生」であるかということが問題であるということを考察する。

地域日本語教室でボランティアをする住民が「先生」として「日本語」の形式だけを切り取って教えようとする時、日本語を母語としない住民の生活につながる「日本語」を得る機会にはならない。一方日本語を母語としない住民が地域の日本語教室に参加し、日本語学習を続けたいと思う背景には、「先生」であるボランティアと、相互のコミュニケーションができる関係性がある。日本語学習活動を通して、または日本語学習の時間以外で、「先生」であるボランティアとの相互のコミュニケーションが成り立っていれば、それぞれの「学習者」にとって意味のある日本語の学習や習得が可能となる。そしてそこで獲得される日本語は、それぞれの生活のあらゆる場面で実際に使えるものとなる。日本語を「教

える「教えられる」という活動の中で、「先生」であるボランティアのあり方はそれぞれの「学習者」の日本語学習に影響を及ぼすということから、地域日本語教育の現場で日本語を「教える」ボランティアの意識やあり方についても考察する。

5-3 では、日本語を母語としない住民の目線からボランティア活動をする人々の多様性について考察し、「多文化共生」を実現させるために必要な意識について述べる。

ボランティア活動をする住民の多様性が地域日本語教育の現場で活かされるのは、それぞれの住民が個々のもてる力を、日本語を母語としない住民のために役立てたいとの動機や目的がともなっている場合である。であるからこそ、同じ地域の住民として、地域日本語教育の場に参加するあらゆる人たちから学ぶ姿勢を持つことが必要である。また参加者それぞれの個別性に寄り添いながら、自分にできることを役立たせていこうとすることが、地域日本語教育の場で地域住民同士の融和を促進させることになる。

第6章 本研究のまとめ 今後の課題

本研究では「地域日本語教育」について、日本語を母語としない住民の語りを通して考えてきた。そして地域日本語教育の現場では、その方法論のみを整備することが必要なのではなく、どのような意識や行動をもって、活動に臨む必要があるかということについて考察した。しかしこのような意識をもとにした、地域日本語教育現場での実践には至っていない。

今後の課題は、日本語を母語としない住民の語りに寄り添い、ことばを通じた学びを地域社会で共にするものとして、地域日本語教育の現場で具体的に日本語の学習支援活動を実践し、実践から立ち上がる課題点や問題点についてより深く考察していくことである。

【参考文献】

- 岡崎眸（2007）「共生日本語教育とはどんな日本語教育か」『共生日本語教育学 多言語多文化共生社会のために』岡崎眸監修 野々口ちとせ他編 雄松堂出版 pp,273-307
- 尾崎明人（2004）「地域型日本語教育の方法論的試案」『言語と教育－日本語を対象として－』小山悟 大友可能子 野原美和子編 pp,295-310 くろしお出版
- OHRI Richa（2005）「「共生」を目指す地域の相互学習型活動の批判的再検討-母語話者の「日本人は」のディスコースから-」『日本語教育』第126号 pp,134-143
- 田中望（1996）「地域社会における日本語教育」鎌田修・山内博之（編）『日本語教育・異文化間コミュニケーション-教室・ホームステイ・地域を結ぶもの-』（財）北海道国際交流センター pp,23-37
- 森本郁代（2001）「地域日本語教育の批判的再検討－ボランティアの語りに見られるカテゴリー化を通して」野呂香代子・山下仁（編）『正しさへの問い－批判的社会言語学の試み』 pp,215-247 三元社.
- やまだようこ（2000）「人生を物語ることの意味－ライフストーリーの心理学」『人生を物語る－生成のライフストーリー』やまだようこ編著 pp,1－38 ミネルヴァ書房
- やまだようこ（2007）「ライフストーリー・インタビュー」『質的心理学の方法－語りをきく－』やまだようこ編 新曜社 pp,124－143
- 米勢治子（2002）「地域社会における日本語習得支援－愛知県における活動－」『日本語学』vol.21 pp,36-48 明治書院